

令和俳句論考

百瀬 初江

時の疫えきを生き抜きし身に初秋風
天狼の光年を馳す気負けいかな

鈴木 貞雄

(第七句集『初秋風』より)

本句集にはコロナ禍の時期に詠まれた句が多く収められている。一句目、目に見えない相手と向き合い、多くの犠牲を乗り越え、やっと落ち着いてきた頃、ふと感じた涼風。生き抜いた命を実感した瞬間の句である。他にも「コロナ禍の無音の街や花みづき」で、人の気配がなくなった街を静かに詠み、「疫病えびやみより言葉おぞまし卯月寒」では、言葉のもつ恐ろしさへの警鐘を込めた。そして「草引いて引いて疫病に耐へにけり」と我慢を続けた。こうした句と重ねることで、掲句の「初秋風」はより深みを増す。

二句目、天狼シリウスは天空の中で、最も明るく、青く美しい恒星である。その輝きは幾光年の距離を駆け抜けてくるのだ。冬の夜空を見上げ、天狼の尽きることはない輝きに気負を感じた作者。天狼に自らを重ね、その生を全うしようとする作者の静かな意思を感じる。掉尾の句

俳人協会顧問

死の冷えの移りて重き聴診器
木漏れ日を散らかし夏の庭にわひそと

細谷 唳々

(『細谷唳々集』より)

本集は自註現代俳句シリーズの一冊。作者が『桜桃』『二日』『父

の夜食』の句集から三百句を自選し、振仮名を付した。

一句目、小児科医の作者が初めて患者の死に向き合ったときの句である。幼い命を救えなかった無力感が聴診器を通して重く押し掛かってくる。胸がつぶれる想いがありのままに詠んだ若き医師の姿が見えてくる。だが幼い患者に寄り添い、葛藤や喜びを共有しながら「青梅あおぼろやいつか口癖くちくせだいちやうぶ」の句を詠む頼もしい医師へと成長していく。本集にはその人生が刻まれている。

二句目は令和二年の作品。「散らかす」はマイナス評価の他動詞だが、木漏れ日に限ってはそんな感じはない。」と自註している。日の斑がちらちらと緑蔭の庭に涼やかに日を落とす。生涯を通して命と向き合い続ける作者の凛とした佇まいが彷彿とする。

氏は「一葦」件」同人

陽ひの中なかに出て行く径みちや野紺菊のこんぎく
蝕く終おへしひかりの月つきや冬ふゆ薔薇ばいばい

林 桂

(第十句集『遠近紀行』より)

あとがきには「日常の時間を『紀行』と呼び、小さな旅の時間をも『紀行』と呼ぶ」とある。作者にとつて人生は旅なのだ。

一句目は「父母の亡きみなかみの月夜かな」の句で始まる「みなかみ紀行」中の作品。作者が歩いているのは日陰の径。だが、その先には明るい陽が射し、可憐な薄紫の野紺菊が咲いている。径はそこへ続いているのだ。望郷の思いとともに、父母の死を乗り越え、前へ進んでいこうとする心情が感じられる。

二句目は「手帳紀行」中の句である。月蝕は神秘的な夜を演出する。徐々に欠け、闇に姿を隠す月。やがて少しずつ光を放ちながら再生する。蝕を終え、新たな「ひかり」を纏った月が、冬の

寒さに耐えて咲く薔薇をやさしく照らす。蝕後の月と薔薇の取り合わせが幻想的な世界へ読者を誘う句。句集は全句振仮名付き。

氏は「鬩[TATEGAMI] 編集同人

冬ざれの会津ゆつたて鳥となる

田村 道子

狼が啼く夜星ふるべゆらゆらとふるべ

(第一句集『狼が啼いた夜』より)

一句目には、「山道などの立木に結び残しておく置き文」の註がある。「会津ゆつたて」とは、逢うことが叶わない相手を想い、文を木に結ぶ会津の風習だ。時には冥界への文もある。そこには、敬虔で純粹な想いが込められている。切なく心を揺さぶる魂の言葉は、木々も枯れた冬の日、羽を持つ鳥となり想い人のところへ飛んでいく。その土地の言葉でしか語れない想いを掬い上げる句。

二句目、註に「手術後の入院中、脳梗塞発症、直ちに手術。朦朧とした意識下で聞いた音。狼の声かと。」とある。生死の間で作者は、古神道の呪文の言葉「ふるべゆらゆらとふるべ」を唱えた。この呪文は、十種神宝の霊力を呼び起こすことができることとされている。必ずや星の力が作者の生命力を強めてくれると願わずにはいられない。まさに魂の慟哭の句である。

氏は「岳」同人

連弾の指の漣春動く

楨 かをり

休符なき雪解雫のワルツかな

(第一句集『音の風景』より)

一句目、ピアノの連弾は四手連弾とも呼ばれている。二十本の指がリズムを合わせ、なめらかに鍵盤を弾いていく。互いの音をしっかりと聞き分け、漣のように指が動いていき、立体的で華や

かな音色を奏でる。そして、その音色は演奏者と聴衆の間を漣となって拡がっていく。明るい春の訪れである。

二句目、雪解氷が絶え間なく雫となって落ちていく。雪深い地に春を予感させる冷たく澄んだ雪解氷。その雫が奏でるメロディは、楽譜となって作者の脳裡に浮かび、耳には春を予感するワルツとして聴こえてきた。身体の内側から湧いてくる静かな喜びが感じられる句。あとがきに「私の回りには、常にいろいろな音が流れています。」と述べる作者は、確かに音の風景の中にいる。

氏は「ランブル」同人

かたつむり一枚の葉を傾かす

遠藤 容代

開くとき翼の音のする日傘

(第一句集『明日の鞆』より)

一句目、紫陽花であろうか、たくさんの葉の中に一枚だけ傾いている葉に気付いた作者。よく見ると、そこには、しっかりとかたつむりが貼り付いていた。かたつむりの重さが葉を傾けていたのだ。それは確かな命の重さである。新鮮な驚きと慈しみの眼差しを持ち、その情景を切り取った作者の感性が冴える。

二句目、照りつける太陽の日差しを避けようと日傘を開く。そのときの音は、翼の羽ばたきのように作者には思えた。まるでメリーポピンズの傘のように、空に浮かんで、何処へでも飛んでいけそうな気がする、そんな想いが読む者の心にも湧いてくる句。

句集掉尾の句は「手袋を明日の鞆に入れておく」。読み終えて、思わず明日の鞆に何を入れようかと考えた。心弾む句集である。

氏は「聲」天為」所属

(筆者住所 〒300-0815 土浦市中高津二一六一五)